

シュリンキングシティ再考 | 日独国際セミナー 京都 2019

第1セッション

「イニシアチブとイノベーション」

コーディネーター：吉田友彦

発表：大谷 悠、Steffen Praeger、加登 遼

海道：ただいまからセッション始めたいと思います。今日は、ただいまから夕方の5時まで、三つのセッションを開催いたします。第一セッション、第二セッション、第三セッション、それぞれテーマを設けています。日本とドイツのそれぞれの研究者からテーマに沿った研究報告をしていただきます。それをもとにしてディスカッションを行うという構成になっております。それぞれコーディネーターを設けております。コーディネーターは基本的には我々シュリンキングシティ研究会のメンバーがコーディネートをするという進め方でございます。

第一セッションを始めたいと思います。コーディネーターの立命館大学の吉田友彦教授にお願いしたいと思います。

吉田友彦：みなさんおはようございます。吉田と申します。立命館大学で都市計画と住宅計画について教鞭をとっております。最初のセッションのコーディネーターを務めさせていただきます。トピックはイニシアチブとイノベーションとなっております。

三つのプレゼンテーションの前に、3人の発表者を簡単にご紹介したいと思います。お二人はドイツの先生で、お一人は大阪です。

大谷先生はライブツィヒから来られました。場所づくりについてお話しいたします。ライブツィヒの場所づくり。2人目はエアフルトからステファン・プラガー先生。廃棄された空間とそして市民の参画というテーマでお話しいたします。3人目は加登先生です。大阪からいらっしゃいました。今は兵庫県の武庫川女子大学で教鞭をとられ

ています。こちらのセッション9分となっております。3人のスピーカーからそれぞれ1人20分でプレゼンテーションをお願いします。その後30分、Q&Aの時間を設けております。Q&Aでお願いしたいのはこのイニシアチブとイノベーションというトピックに主眼をおいて、Q&Aをお願いしたいと思います。

Q&Aの前にまずプレゼンテーションから情報を聞いていただきます。1人目は大谷先生、ハウスオブジャパン、ライブツィヒ日本の家の共同代表を勤めていらっしゃいます。では発表を始めてください。

大谷 悠氏 講演

大谷 悠：大谷と申します。今日は服部先生、海道先生、お招きいただきありがとうございます。私は、2011年からライブツィヒの東地域で日本の家という、ジャパニーズハウスを交流拠点としてずっと運営してきました。代表は降りたのですが、創設者の1人です。まちづくりの活動家をずっと名乗ってきました。今年9月に博士号をとったので、一応研究者のはしくれと呼んでいただけるかな、という状態にはなっております。

今日のテーマは「都市の間における場所づくり」ということで、ライブツィヒ日本の家の一つのケーススタディとしてお話しいたしたいと思います。最初に「都市の間って何なんだ」ということ、これ私が勝手につけてる名前です。どういうことかと言うと、日本で特に問題になっていますが、空き家とか空き地がいっぱい都市の中でできるわけですね。

これに対して一つの解決策は、不動産市場にこ

れを戻すってことです。例えば空き地だったら再開発する、空き家ならリノベーションする、もう一つの方針は行政がこれを管理したり、もう一度使えるような状態にしたりしていくってことです。三つ目は、文化財としてこれを保存する、空き家の文化財的価値を用いて保存していく。どれも無理な場合はほっといてそのうち潰れる、あるいは積極的に潰すという行政的な政策もあり得ると思います。

そういう状態であると、本来、空き家や空き地はなるべく無くしていききたいというのが市場や行政の立場です。しかし、むしろ行政にも、不動産市場にも、手に負えないような空間だからこそ何かできることがあるんじゃないかと。中途半端な状態になっている空間にこそ、ある価値、可能性みたいなものを考えてみよう、ということで中途半端なものを「都市の間、アーバンインビトゥインスペース」と、呼ぼうと思います。

さて舞台は、ドイツ中部の町、ライプツィヒです。90年代前半に「ライプツィヒコントゥ」という標語が行政によって作られました。東ドイツでずっと低迷してきた都市であるライプツィヒが、ドイツ統一によってもう一回蘇るのだと、いう気運がよく表れています。ところが、この期待に反してライプツィヒは90年代に、10年間で10万人というものすごい人口減少を経験します。行政にも、マーケットにとっても非常に予想外な出来事でした。特に、この東インナーシティと呼ばれる、昔労働者が住んでいたところですが、ここが特に人口減少と高い空き家率が問題になりました。2000年ごろだと、地区によっては50%を超えるような空き家でした。

2000年ごろの人口予測、非常に悲観的なわけですが、人口減少が止まらないことを前提として、地区の建物を計画的に減らしていこうという地区開発コンセプトが立てられます。実際に、連邦政府の助成金を利用して、建物がどんどん取り壊されて、その跡地が暫定緑地として整備されていきました。このあたりの話は、本当は深くやりたいのですが、今日は飛ばします。その後どうなったかということ、2000年に入ると人口が下げ止まります。人口安定します。この時

にライプツィヒの人口は一定でいくのかな、という予測が立てられます。これに反して、人口が増えてくわけです。もうちょっと人口増えるのかな、と予測が立てられるわけですが、予想をはるかに上回る勢いで人口が増加しています。今、60万人に達しています。

ここ30年、ライプツィヒの人口予測は1度も当たっていないということが見えます。興味深いのは、90年代に一番人口が減少していた東インナーシティが、2010年代に入ると人口が最も増加した地域に完全に切り替わります。どんな人が東インナーシティに急増したのかというと、外国人と若者です。

一方、東インナーシティはもともと低所得者が貧困家庭が多い地区です、そこに外国人と若者が流入してきます。2015年になると、欧州難民危機が起こって、中東系の外国人が増えていきます。これによって、非常に地区の多様性が高まっていて、社会的統合、ソーシャルインクルージョン、インテグレーション、っていうものが非常に重要なテーマになっていきます。90年代はこのあと成長が見込まれていたもので、一度、一時的に地価が上がります。しかし、その後、人口が増えないってことが分かって、マーケットが沈んでいきます。何とこれが2014年、15年あたりから一気に地価が急騰して、2013年からは地区によっては、5年間で10倍近くになっています。いきなりジェントリフィケーションが訪れた、という凄まじい変化を体験しています。

今までの話をまとめると、ライプツィヒは1990年に予想外の人口減少に見舞われました。そして、大量の空き家や空き地が発生します。そのあと2010年に予想外の人口増加に見舞われます。大量の難民や移民、若者層が流入してきます。これによって、社会的統合、ソーシャルインテグレーション、とジェントリフィケーションが課題になりました。東インナーシティがこの二つの予想外の急激な変化に一番晒された地区であります

ここから僕らの日本の家の話ですが、そんな地区に僕らの拠点があります。2011年に立ち上げたのですが、最初の物件はここ、北です。ハウスハ

ルテンというNPOの物件を利用して始めました。ハウスハルテンとは簡単にいうと、空き家の所有者と利用者を仲介するNPOです。彼らのおかげで約120平米の建物の一階を、家賃なしで借りることができました。これによって日本の家を立ち上げることができました。

2012年秋になって、東インナーシティに引っ越してきました。アイゼンバーン通りという東地域のメインストリート沿いにあります。10年くらいずっと空き家で放置されていた、商店街の一角です。平面図ですが、大体、66平米くらいあります。イベントスペースだけで見ると40平米です。メンバーによってDIYで空間作りしていきました。家賃は2015年までは毎月33ユーロと格安だったんですが、その後、毎月230ユーロに上がります。それでも他の物件に比べれば低い水準です。どんなことをしているかという、ここからビデオを見ていただこうとおもいます。週に2回行われているご飯の会をしています。

6時ごろになると、人が集まってきます。この時は、2015年の冬なんですけど、難民で渡ってきたアフガニスタンの子ども達がたくさん、日本の家に訪れました。大人の二人が難民支援をやっているドイツ人のボランティアで、彼らが連れてきてくれました。この後、彼らは難民の男の子たちは、学校が始まるまでずっと日本の家に遊びに来るようになりました。大体、3ヶ月くらいはずっと来ていました。

その後、学校が始まって忙しくなり来なくなりました。こんな感じで、まず皆で料理を作り始めます。料理ってあんまり言葉がいらないので、結構コミュニケーションは楽しかったりします。この女の子の半分がインド人、半分はオーストリア人の女の子で「自分の自慢のカレーを作る」ということでした。オチをいうとあんまり美味しくできなかつたのです。ちょっと作りすぎちゃって、焦げちゃったのですね。ただ、僕らはレストランじゃないので。全部ほぼボランティアでやっていますし、食べる時も投げ銭つって寄付金でやっています。

まずくても「ああ、まずかったね今日。ははは」みたいな。「お前作ったんだって？今日、ひどいなあ」みたいな感じで、それはそれでコミュニケーションが始まる、みたいな。そういうネタとして

の料理みたいなどころがあります。

8時くらいになると食べに来る人たちが集まってきます。大体、近所の人たちですね。誰が支持するでもなく、何となくみんなが手伝って配膳してくれたりとか、何となく空間を作るのを手伝ってくれたり。結構外で食べる人も多いです。というのも中が40平米しかないんで、結構狭いので、特に夏なんかは結構外に広がって食べています。勝手にジャズセッションが始まったり。この他にも色々なワークショップやったり、コンサートをやったり、いろんなイベントやっています。現在、世界90カ国以上から、のべ9,000人～1万人弱くらいの人たちが日本の家を訪れています。

「収入はどうしているの？」とよく聞かれますが、収入源はドネーションが半分くらい。あとはご飯の会の時の飲み物の収入と助成金なんかで賄っています。「誰がやってるのか？」これは結構大事です。こちら短いビデオを見ていただきたいと思います。2017年末に日本の家でドキュメンタリー映画を作ったんですが、その予告編です。

いろんな国籍のいろんな階層の人がいるのは分かっていただけだと思います。職業としては、だいたい失業中の人とか、ワーキングホリデー中の日本人とか、学生とか、難民申請中の人とか、大体、定職がなくて時間がある人、言ってみれば暇人が88%占めています。定職を持っている人は12%しかいないです。

何を隠そう私自身なぜ日本の家を立ち上げたのかというと、暇だったからです。ドイツで、非常に暇人をやっていたんです。じゃあ「この活動で何が達成されたのだろうか」ということですが、端的にいうと人的なネットワークであろう、もっと簡単に言えば友達の広がり、みたいなもんです。これまで400回以上、ご飯の会をやってきて、のべ2,000人以上が、一緒に手を動かしながら料理をしました。

それから、これまで5回、空間の改修をしました。100人以上の人たちが一緒に空間を作っていました。アートやまちづくりをテーマにした大きなワークショップをやりました。これによってだいたい1000人以上の人たちが運営をしたり、関わったりしました。

ということで、いろんな人々が一緒に手を動かすことで人的なネットワークが出来ていきました。

2011年から2018年まで、4期に分けてそのネットワークがどうやって変わっていったのかをお話したいと思います。最初、2011年から14年くらいは、こじんまりとまとまったネットワークです。中心に日本人が二人、一人は僕で、もう一人はのり子さんというパートナーです。日本人が多いことがよくわかります。赤が日本人で、青がドイツ人で、黄色がその他の人たちです。黄色に白でくっついてあるのは難民申請中の人です。

この後、ご飯の会を始めることでネットワークが広がりました。ここに地元の若者たちが入ってきています。例えば、アーティストや学生、ミュージシャンが入ってきます。その後、2015年に難民が流入してくると、この地域に難民の人たちが入ってくるのがわかります。彼らも日本の家に参加しています。

ドイツの社会とつながり始めました。例えば一緒にイベントしたり、まちづくりの団体の人たち、行政の人たち、研究者の人たちと。これがもうちょっと経つと、2017年になると、コアのメンバーの日本人が帰国して抜けるんですが、そこに難民申請中の人たちが入ってくる。だからそれまでお客さんで来ていた人が、時々手伝う人になり、最終的には自分がメインで日本の家をしていくというフェーズがありました。

一期から四期までまとめるとこういう形になります。簡単に言うと、地元住民、外国人や難民の方が多いですよね。地元住民とドイツ社会、行政やまちづくりの専門家のいるドイツ社会を、日本人あるいは日本の家のネットワークが二つを繋いでいると「難民移民の社会とドイツ社会を日本の家が繋いでいるんだ」ということがここから言えます。

まとめます。ライブツィヒの日本の家は、家賃のかからない空き家があったから始まりました。常に暇人が中心となって運営しています。ともに手を動かすことで、多様な人的ネットワークが出来てきました。多様な人的ネットワークがドイツ

と移民を結びつけています。

空き家の増加という都市の予想外の変化によって活動が始まりました。その後、難民移民の増加という都市の予想外の変化によって関わる人が変化したと、これによって社会的統合に不可欠な多様な人的ネットワークが結果的に生まれたということが見えてきます。

結論を言って終わりにします。アーバンシュリンゲージ、都市の縮小があったわけですね。たくさん空き家や空き地が生まれます。これをベースに暇人たちがDIYで交流の場所をつくれます。交流の場所があるとそこに予期せぬ再成長があります。もう一回成長し、難民移民が入ってくると、こういう変化がここに加わります。このDIYの交流の空間があることで、人々のネットワークができます。これは結果的にソーシャルミックスとか、社会的統合につながっていきます。

行政にも手出しできない中途半端な「都市の間」というものは、なるべく無くした方がいいと言われてきました。日本の家から見えてくることは、DIYの交流の場所を作る、その土台として非常に重要な役割を果たしていくんじゃないかと、いうことが見えてきました。以上になります。ありがとうございました。

吉田：大谷先生ありがとうございました。ライブツィヒにおける交流施設についてお話しいただきました。人的ネットワークの変遷について、非常に興味深く拝聴させていただきました。

ステファン・ブラガー氏 講演

吉田：早速ですが、次のスピーカーを紹介したいと思います。ステファン・ブラガーさんです。ブラガーさんからはエアフルトの事例、そしてその他の都市についてもお話をいただきます。それではお願いできますでしょうか。

ステファン・ブラガー：ご紹介をいただき、ありがとうございます。本日は皆様方の前でお話ができること、大変光栄に思います。私の方からは、本日放棄された空間、そして市民参加、その中においてパイオニアたちの動きをご紹介したいと思います。少し大掛かりなタイトルになっておりますけれども、具体的な事例なども織り交ぜながらお話ししたいと思います。

私はステファン・ブラガーと申します。NPO・NGOのCEOを務めております。エアフルトにおりまして、プロジェクトマネージャーとして組織を回しております。それから、エアフルトの大学で10年ほど教えております。また、エアフルト市議会のメンバーでもあります。地域の行政にも携わっております。

それではエアフルトがどんな地域なのかご紹介をしたいと思います。ミツェルドイツランドということで、ドイツの真ん中と直訳されます。しかし、実際にはなかなか、ミドルイスということで、石油はないのですけれども、ドイツの中東と言われることがあります。こちらはサクセン州です。皆さん、ご理解いただきたいのは、非常に大きく人口が減少しているということです。その大部分が東西ドイツ統合の影響を受けて、ということでもあります。他のメンバーからももう少し詳しい話は後ほどあるかもしれませんが、ご覧いただきたいのは、過去だけではなく、95年から2017年のところ。青の色が濃くなればなるほど人口の減少率が高いということでもあります。濃い青になりますと、20%以上人口が減少しているということを意味します。この地域、先ほどの地図を見ただけですと、すでに大幅の人口減少が特に地方のところできている。

今後、さらに大きな課題が待ち受けております。

ご覧いただきますと、さらに4分の1くらいの人口が減ってしまう試算であります。特に今、対象としている地域においては、人口減少が著しいことが予測されております。この東ドイツの人口減少に伴って、いわゆるコンクリートの建物を、70年代とか60年代、それから80年代の住宅として建てられたものがいま潰されております。

教会もそうです。2,000ほどありますけど、うち500は再利用するために空いてしまっております。これはコミュニティショップということで、中古のものが低所得層の方々に向けて売られている状況があります。歴史的な郊外の建物も同じようなことがあります。コミュニティにおいて、一定の役割を担っていました。重要な役割を担って、アイデンティティ形成の元となっております。コミュニティの歴史に根ざした建物であります。

例えば図書館などもそうですが、ベルリンの壁の崩壊後、使われておりません。ここは人が集う所でありました。教育を受けられる場所でありました。コミュニティが形成された場所でありました。こういったことを念頭におきまして、我々の組織はクルトアハンザというプログラムをはじめました。

これはハンザ同盟の文化版と言えらると思います。プログラムのスタートでは、放棄された場所での潜在力のあるものとしてスタートしました。欠点ではなく、何か将来に向けたポテンシャルを持つものとして考えました。

ライプツィヒのケースもそうであったと思います。ここでの問題は、果たして新しい使用方法を見つけ出すことができるかどうか、ということです。地域に住む人たちが、これを活性化させる方法を見いだせるかどうか、ということでもあります。より持続可能な、コミュニティ再生につながるものができるかどうか、同時にビジネスを構築できるかどうか、ということでもあります。

つまり持続可能なアウトカム、これを期待したわけ。この持続可能性についても我々は注力をいたしました。組織のあり方についてもそうです。そして人ができるだけここに滞在したいというような取り組みを考えました。

例えばスカランシップということで奨学金を1年間提供したり、この間必要な知識を学び、どの

ように空間を創出したらいいのかを学んでもらう取り組みをしました。同時にどのように起業家をサポートしたらいいのか、ということも学んでもらいました。奨学金は9月末で終了しましたので、第2ラウンドに入っております。今度は2年間の奨学金になります。

ミツェルドイツランドにおきましては、他に関心のある組織、つまり放棄地あるいは建物があって、こういったプログラムに参加したいところはないかと呼びかけました。そして2ヶ月以内に40以上の組織、機関が関心あると手を上げてくれました。この大都市に隣接する小さな町、村が手を上げてきました。43のうち9つについて、我々このスカラシップの中に入れていこうと決めました。規模も異なりますし、大きな村、大きな街もあれば小さな村もあります。文化的にいても非常に大きく異なります。四つほどの例を皆さんにご紹介できればと思います。

どんなことが起こっているのか、どのようなことをやっているのかをご紹介できればと思います。一つはアルテンブルクですけど、人口はかつて5万人以上いたわけですけども、今は3万人ちょっとということです。市の中心部で、歴史、文化にあふれていますが、実際に歩いていると3つに1つくらいが空き家になってしまっています。例えば、非常に歴史的なタウンパレスというところなんです。これは新しい目的を与えられて再生しています。

アルテンブルクにおきましては、クリエイティブ産業に開始しようということで、使い始めたわけです。一例ですが、起業家が実際に取り組んだこととして、このデザインをして、これは棺桶なんですけども、マーケットを創出したわけです。それからサイツという場所の例あります。4万人以上の人口だったのが、今2万7千人になっています。もともとは工業的な産業のまちでした。旧工業地域が都市の中心の近くにあるわけですが、空き家が目立っています。全く別のパートナー組織が管理をしております、中心部の近く、8分くらいのところに、アーバンビレッジというところがあります。20人くらいがこちらに居住しています。ここでデジタル産業やワイナリーといった事業が立

ち上がっています。

教育、サービスを行って、持続可能な事業形態を模索しています。10年ほど、こういった活動をしています。その後、都市の中心の図書館の方に移りまして、2年くらい前にこちらを買い取り、今彼らはアーティストとしてワークショップやスタジオ等を運営しています。特に近隣から来るアーティストはたくさんいますので、今、増えすぎて土地が高くなってきています。だから、近隣の小さい町に移ろう、という人も出てきているくらいです。

次はゲーセンという村です。だいたい3,000人くらいの人口だったのが、今は1,800人くらいです。このゲーセンはとても興味深いケースです。村人たちは、大々的に地域通貨を実験的に導入しています。これは昔の電車の駅です。こちらを村人たちが安く買い取って、地域の経済のサイクルを立ち上げようとしています。

例えば、ゲーセンからの電気工事の技師が電車の駅の電気設備等のケアをしています。この地域だけの通貨を得て、この村だけのお金を使ってパン屋さんでパンを買える、とかですね、地域のコミュニティの店舗に行くと、食料品を買ったりすることができます。

地域の中での閉じた経済のサイクルを立ち上げて、それによってコミュニティの中でお金が循環するように、つまり、地域の中から資金が外に出ないようにしています。近隣の地域には、三つの大きな銀行があるわけですけども、この地域には全く投資しないことを決めましたので、住民はその中でどうやってリソースを確保するかを考えなければいけなかったわけです。

こちらがラウシャという町です。ベルリンの壁の崩壊まで5000人くらいの人口がいました。今、大体3000人くらいです。こちらは谷間の町です。7つの山に囲まれた谷間の町で、遠隔地で隔離されていて、この村ならではの文化があります。工芸やものづくりでよく知られている土地です。家族の中で技法を伝えて工芸を行なってきています。

例えば、ガラス細工ですけども、ほとんどの村の家庭ではこういった技術を持っています。ただ、どんどんと生業とすることが厳しくなってきました

た。市場と競争していかなければいけないわけです。クリスマスに使うようなガラスの器のようなものを作るわけですが、それを大量生産の市場と競争しなければならぬわけです。クリスマスツリーのように大量のガラス製品を使う場合に、大きな工場から出てくるものと同じような安い価格で、同じものを作れなくなってきたわけです。そういったことでこの生業が低下してきました。

何かを変えなければいけない、イノベーションが必要だということになりました。そこで、市民団体が古くて使われていない廃校の土地を買ってそこでスタジオを運営しています。ガラス細工のワークショップを行って、新製品を開発しようという試みを行っています。

国際的な、半年くらいインターンシップのプログラムを行なって、海外からアーティストを招いて、新しいアイデアを吹き込み、これまでの伝統に新しい側面を加えようとしています。これによって地域の職人のコミュニティにも変化が生まれてきています。起業家等がこちらに来て、ラボを作って、活動しているというのが現在の状況です。こういった起業をサポートしていったら、結果がどうなるかは、事業としてどう立ち行くのか、これからまだ結果を待つところではあります。

現時点でも言えることとして、いくつかあります。例えば女性の起業家がどんどん増えてきています。人口が減少してきたときには、若い女性が地域からどんどん流出していくわけです。今は企業をしたいということで若い女性が戻ってきてこの地域に住みついています。またUターンで都市から戻ってきている人がいます。大都市で学校に行っていて、就学して、いわゆるUターンということで故郷に戻ってきている、という人が増えています。

外で学んだ新しい視点を活かして、地域に持ち帰ってきて、新しいビジネスを立ち上げてきています。デジタルのパイオニア、コンピューターやデジタル環境で働いている人たちに関しては、どこで仕事をするかはそれほど重要なことではありません。だから、こういう地域に来ている人もいます。つながるインフラがあれば、どこからでも仕事ができる立場の人たちも来ています。こういう人たちは同時並行的に変化が起っています。

ほとんどの場合、10人、20人ほどの人がグループで来て、ホームシェアで場所を借りて、ということでもちが盛り上がってきています。2015年から難民危機がありましたので、その影響もあって、難民の方達も来ています。ザルフェットの町のパートナー企業が言うには、人口の50%ぐらいが難民の人たちが来ているとのこと。変化によって行政の方も新しいアプローチが求められているわけで、移民してきた起業家を支援するための施設やラボをつくっています。

「仕事をすることによって自立的に生活できるように」という支援をしています。日本も同じようなことを行うには、行政の手続きがいろいろあると思いますよ。労働者が入ってくると、ビザを取ると行った手続きが大変だと思うんですけど、起業をした方がそのプロセスが簡素であるということ、難民の人たちがこう行った状況を利用して、文化的な統合とそれから生業を立ち上げることをするか、ということを考えなければいけないです。

新しい農業、そして環境的なサービスも考えなければいけません。公共サービスも重要になってきます。数週間前、コミュニティの劇場を立ち上げたいと言うような意見もありました。小さい町で映画館を立ち上げるというのは、簡単にはできません。何らかの方法で資金調達を考えなければいけません。

ドイツではマッスルモーゲッジという定義があります。どういうことかということ、投資、資金調達の新しい方法をゲットしなければいけない、ということです。都市建設において、銀行からのお金ではなくて、人に来て一緒に手伝ってください、労働力を提供してください、という考え方です。

お金がなくても町の人で建てられるように、市民の起業を推進していかなければいけない。お金をたくさん稼げばいいということではなくて、一般的な市民の参画関与、関心の高さが重要になってきます。これからの可能性とイノベーションやコミュニティのアプローチが、こういった中で変化としてどんどん入っていきます。若い人がどんどん来て新しいことしたい、となると、年配のコミュニティの人たちは必ずしも喜んで新しいことをやろう、と受け入れるわけではありません。乗

り越えなければいけない問題です。

インフォーマルな市場が出来てくると、ラウシャからクリスマスの飾りを買って、そしてゲーゼンにて販売したいということになる。流通や物流の方法、市場についても新しく構築していかなければならない。大きな問題となってくるのは、私たちと一緒にやっているパートナー、企業や団体ですね。この町にどれくらいのポテンシャルがあるのかというのが、自分ではなかなか分からない。だから、外部からの視点が必要だと思います。そして最後、島国根性のようなものだと思いますけれども、10人くらいが外から村に入ってくる。そうすると色々と摩擦が起きてくるわけですね。外から入ってきた人が完全に孤立してしまう。こういったことも何らかの新しい方法を考えて、どうやって統合していけるか、融合していけるか、というアプローチが必要だと思います。ご静聴ありがとうございました。

加登 遼氏 講演

吉田：ありがとうございました。ステファン・ブラガー様でございました。お二人のプレゼンターのお話の違いは、都市のスケールが少し違うのかな、と思いました。大谷先生の方からは56万人の人口のライブツィヒについて、プレーガー先生のケースではより小さな村や町の話、まあおそらく3万人、4万人の街についてお話をいただきました。

お二人のプレゼンテーションから非常にドイツの事例を詳しく、わかりやすくお話しいただきました。では三人目の演者の方をお招きしたいと思います。武庫川女子大学から加登さんです。

加登 遼：武庫川女子大学で研究をしております。このような大きなホールでプレゼンテーションを行うのは初めてでして、非常に光栄に思っています。今日の観客の皆様は、日本人の方が多いようですので、日本語でもご紹介します。本日は平日の朝早い中、お越しいただきまして大変ありがとうございます。発表自体は僕のドクター論文からなっております。大阪の郊外の茨木市で立地適正化計画をベースとした内容になります。

本日の発表は英語ですという風に、通訳の方に言ってしまったので英語で発表させていただきますが、もしわからないこと等ありましたら、直接僕の方までコンタクト取ってくれば、と思います。本日は都市のスプロール地帯におけるスマートディクラインについてお話ししたいと思います。特にウォークアビリティの観点からお話しさせていただきます。

まずはこちらが私の研究課題です。日本のシュリンキングシティについて、どういう風に設計していけばいいのか、問題は何なのか、このトピックはセミナーの主題ともなっております。日本では多くの人口減少の都市があります。私は、これは日本の都市計画の重要な課題であると考えています。この問題に対して、日本の中央政府はコンパクトシティの政策を取り入れました。コンパクトシティの政策というのは、海道先生がご紹介されたものです。この政策をドイツから日本へと輸入された海海先生、確か30年前だったと記憶しております。

これがコンパクトシティの政策の中身です。高密度地帯を電車の乗り換えの地帯の近くに作ります。この赤が高密度地帯を示しています。現在の都市の形はこの下の状況で、より分散している状況です。都市の施設、スプロールの場所をなるべく少なくしようというものです。

コンパクトシティの政策は、現地、ローカルで描かれています。ですがメガシティの端というところがあります。都市部のスプロール地帯においてコンパクトシティの政策を適応することはできるのでしょうか。私はコンパクトシティ政策を適応することは不可能だと思っています。都市部のスプロールの空間は、人口が急速に増加した。高齢者の人たちは、身体的な問題もあり、街の中をいろいろ動き回るといことはできません。近隣の地帯、歩いたり自転車に乗ったりして動くことしかできないということです。従って、この動きやすさが一つ問題になってきますこのスプロール空間の問題が、重要な問題になっている。これは一つドイツとの違いであるかもしれません。私は都市部における政策はシフトするべきだと思っています。コンパクトシティからスマートディクラインに移るべきだと思っています。

つまり人口が減ったとしても、生活に必要なものというのは保証するという事です。スマートディクラインの価値についての評価を私の研究では行なっています。日本の都市計画の政策が、人口増加のアプローチから人口減少の戦略へと変わってきています。このヴィジョンのために、今回の研究の中ではスマートディクラインの評価をカビリティ指標を使って説明するという事です。ジャパニーズコンパクトシティの代替として提案するものです。

四つのステップになります。最初は都市のスプロールエリアの分類を行います。これが2章目になっています。そして3章目に関は、ウォークアビリティ指標を開発します。これによってスプロールエリアの評価を行います。この結果2と3の結果を分析することによって、シナリオの評価を行います。ウォークアビリティ指標を使った評価ということになります。最後の5章目で結論という

ことで、これが博士論文の内容になっております。

私が使った分析手法をこちらでご説明します。マルチスケールの分析を行います。人間のスケール、そして都市のスケール、その都市のそのブロックにおけるスケール、まちづくり活動やコミュニティの活動を使ったスケールです。大阪の北部のスケールはこのメトロポリタンスケールというところです。特にスプロールの地域が多いところです。そしてシティスケール、市のスケールとしては茨木市にしました。ここは徒歩や自転車で移動する人が多い場所だからです。そのためにここを選択しました。

続いて2章目に入っていきます。スプロール地帯についての分類、これが私の研究の主題となっている箇所です。茨木市をケーススタディとして取り上げました。大阪の都市部の北部にあります。京都と大阪の間にあります。これが日本の地図です。京都はここです。明日は名古屋に行くのでこのへんに行きます。大阪北部都市圏というのは、アジアのメガシティの一つです。大阪の都市部は、1950年から70年代に非常に急速な都市化を進めました。ここが都市部です。小さなスプロールエリアがたくさんあります。一貫しない形でいろいろ分散したスプロールエリアがあることがわかります。

スプロールエリアの分類に入ります。やり方として因子生態分析を行いました。日本の統計データを使います。結果はここです。この地図からわかることは、都市部のスプロールエリアは黄色の部分なんですけれども、都市のスプロールエリアは密集地帯の縁にある。つまり、外周にあるということです。私のプレゼンの中ではスプロールエリアが主題になっているので、この外周、外縁にあるということ覚えておいてください。インフラが十分でないという状況が多く見られます。それは、かつての農業が行われていた地帯だったというのも原因になっています。ということでこれがスプロールの絵だと覚えておいてください。

続きまして三つ目がウォークアビリティ指標の

開発です。スプロールエリアの評価をしようと思いました。ウォークアビリティの定義というのは、居住空間において歩きや自転車を促進する場所を指します。主観的な都市部における居住エリアに対するイメージの改善を行うことによって実現しようというものです。

例えば、ビジネスの中心地、東京や大阪の中心などでウォークアビリティの指標を考える場合があります。

私たちはそういったビジネスの中心地ではなく、都市部における居住空間のウォークアビリティに焦点を当てています。ウォークアビリティのコンセプトに基づいて、この指標の中身というのは、GISに基づいて作りました。ウォークアビリティに関する主要な論文に基づいて書いたものです。この中の構成要素がここに書かれております。

例えば、住宅の密集度ですとか、施設の使いやすさ、そして道がどれくらい繋がっているか、地域の安全性などが挙げられています。ウォークアビリティの指標はこのように使われています。SEMによって作られました。ウォークアビリティの指標そしてこのSEMから作ったんですけども、この効果がスコアとして出せることがわかります。これによってそれぞれのブロックにおけるウォークアビリティの状況を出すことができます。そしてマップに落とし込んでいます。このヒートマップのようにウォークアビリティを描いています。赤いところが高いウォークアビリティを示します。こちらのマップでは二つの興味深い点が言えます。

まず高いウォークアビリティの地帯というのは鉄道沿いにあるということ。直線的にあるということ。日本のコンパクトシティのポリシーとは反する状況になっている、直線的にあるということです。二つ目、高いウォークアビリティの場所は、ある地帯に集積しているということ。例えばこの辺とか、茨木市の真ん中あたりということ。一つ疑問になるのは、この高いウォークアビリティの場所に住んでいる人たちは歩いたり自転車に乗ったりしているのか、ということ。ウォークアビリティのスコアと地域のウォークアビリティに対する魅力、歩きたいとか自転車に乗りたいたいと思っているのか、ということを検証します。

検証方法は二段階無作為抽出です。898人の居住者に質問をしました。居住地の魅力について聞いております。歩いたりサイクリングしやすいかどうか、自然環境があるかどうか、あるいはローカルな活動に参加しやすいかどうか、あるいは十分に病院等があるかどうか、ということです。これについての回答を集めました。説明変数ということでも見ております。その結果がこのようになっています。この結果を見ますとウォークアビリティの指標は、この日常徒歩、あるいは自転車に乗るかどうかということと密接にリンクしているということがわかります。

CHAPTER 4です。こちらではシナリオを構築しております。日本のウォークアビリティ指標に基づいて、ということであります。シナリオプランニングということで、茨木市役所の職員に対して半構造化面接を実施しました。茨木市の将来、20年後の茨木市の将来に影響を与えるであろう原動力を探るということ、2つの側面から見てまいりました。その結果として2つの原動力、これが指摘をされております。それは、土地利用と都市型施設です。

例えば土地利用ですと二つあります。空き地を利用した多様化、土地調整プロジェクトを通じて土地を再生していくということ。もう一つ、都市型の施設についても二つのカテゴリーがあります。つまり、住民のニーズに合わせて施設を使っているということ。それから鉄道、バス、アクセスがいいということ。この二つの土地利用の側面、そしてその都市型施設についての二つを掛け合わせて四つの証言ができました。

S1 住民が近隣の空き地を利用する。そしてS2がその地方を去ってしまう。S3が駅周辺に有する。そしてS4が交通機関を通じていろんなところに行く。ということで、この四つのマトリクスですけれども、このシナリオを評価する上でわかってきたことがあります。土地利用が空き地を利用して多様化しているということ。そして住民のニーズにかなった形で施設利用があること。この二つが顕著になってきております。

四点についてこの土地利用のエントロピーで調

べております。また土地利用に関する個別データ、これを計算しております。従属変数がエントロピー、そして独立変数がその土地利用に関する個別データということで、このような分析結果になっています。私の発表ではこのスプロールエリアにフォーカスしております。土地利用の多様性を拡大するには、例えばこの農地ですとか、そういったところを空き地の有効利用することであるということが分かってきております。

次にロケーションとそこに住みたいか、ということの関連性を見ていきました。このセクションはCHAPTER 3のアンケート結果を利用しております。住みやすさということについて四つの質問がありますので、それに応える形でこのようにツリーを編成しております。複数の質問がファシリティ、あるいはそのロケーションについて投げかけられまして、ディジションツリーのスプロールエリアにおける結果です。

このディジションツリーは、様々な住民が求めているところとの差があるということが分かります。例えば、住みたい人たちは、病院を地方に、そしてコミュニティセンターを駅前に、ということで差が出てきているということでありました。

セクション 4.2 と 4.3 を踏まえて各シナリオのフローチャートがこのように作られています。非常に複雑になっておりますので、ここではこの一部を取り上げたいと思います。フローチャートは 4.3 におけるディジションツリーをもとに作ったものであります。例えば都市部、あるいはスプロールエリアにある場合、例えば保育施設が駅前にない場合、そしてあるいはコミュニティセンターが駅前にあった場合、都市部に病院がない場合、そして空き地もない場合、そうなりますとその空き地は病院に転換されるべきだ、というようなことが分かるわけです。人が住み続けるためには、こういったことが求められていることが分かるわけです。このフローチャートに基づいてウォークアビリティのシナリオを評価いたしました。

日本のウォークアビリティの指標に基づいて行いましたCHAPTER 3で申し上げたところであり

ます。そのシナリオを分析いたしました。ボックスプロットダイアグラム、それからピーバリューに持って計算をしたところです。ここは特に重要ですので、この数字をここで見ていきたいと思えます。この数字を見ていただきますと、特にこのスプロールエリアのところ見ていただきたいんですけれども、オレンジのところ、近隣の空き地を使う、利用するということです。黄色がその地域を去り、水色が駅前に引越すと、グレーのところはどこでも住んでいると、交通アクセスが良いのでどこでも住んでいくということでもあります。

これを見ても二つのことがわかります。非常に興味深い結果がわかります。まず一つ目、この三つのシナリオですけれども、ウォークアビリティのシナリオは、近隣の空き地を利用するというのが、若干他よりも多くなっております。この三つよりも多くなっております。おそらく、住民は将来的にそのシナリオがなくても住み続けられるということを示唆しています。そして四つのシナリオのうち、ウォークアビリティは、若干多くなっております。どこにでも行くという人に比べて多くなっております。コンパクトシティの対象となっている人たちに比べて多くなっております。

つまり、近隣の空き地を利用することは、日本のコンパクトシティにとって代わる一つ有効な代替手段であるということが言えると、いう風に考えます。結論ですけれども、空き地を利用することは、コンパクトシティ政策にとって代わる一つの有効な代替策であるということが言えます。このシナリオ、スマートディクラインとして有効であるということで考えています。以上です。ありがとうございます。

吉田：加登さん、ありがとうございます。大阪北部のウォークアビリティ、歩きやすさについてお話いただきました。空き地の重要性、それをどう活用していくか、と縮小する町で都市のスプロールの地域で、空き地を活用していくことが大切だ、というお話だったかと思えます。

パネルディスカッション

吉田：では、Q & Aに移りたいと思います。まず発表者間の間での質問と、次に私から発表者の先生方への質問と、それからこういったプロジェクトに対する議論を深めていきたいと思います。では、どうでしょうか。発表者間の中で、お互いに何かこの3人の間でご質問等ありますか。

大谷：お二人のプレゼンテーション、とても興味深く拝聴させていただきました。プラガー先生に1つ質問があります。最後のプレゼンテーションの中で、摩擦について述べられていました。新しく町に入ってこられた人ともともとずっとその地域にいらっしゃった人との間で摩擦が起きるといようなお話があったと思います。

私もそのトピックに関してはとても関心があります。どこでもあると思うんですね。もともといる人と新しい人と間で摩擦が起きるといのは。こういった摩擦をまずどのように解決していくのか、この2つのグループ間の中でどうやって友好関係を作っていくのかと。

摩擦はある意味刺激としてお互いを理解するために必要な面でもあると思うんです。最終的な相互理解にたどり着くためには、摩擦も段階として、それを乗り越えてということもやっていかなければいけないのかもしれない。その摩擦をどのように導いていくか、デザインしていくかということにも関心があります。

です、その摩擦はいけないと、摩擦を避けるということだけでもまたいけないという気がしています。いかがでしょうか。

ステファン・プラガー：一般論として、おっしゃる通りだと思います。まずお互いにどういうグループとどういうグループが対峙しているか、ということなんです。こういうプログラムをやるとよく出てくるのは、典型的に市民団体があって、例えばなんとか協会とかですね、一定のグループの人たちが「新しいことやりましょう」「プロジェクトしましょう」と、この地域で何か始めましょうと、いう人がいます。行政側が一方で対峙する。町の行政が、地域の人たちが、地域の政治家は厳しい

状況に直面しているわけです。いろんなギリギリの決断を迫られている状況であって、縮小している地域では、すでにいろんなことが難しい。意思決定するのが、ギリギリの状況でやっている。どうやれば、新しいチャンスが見つかるのか、と厳しい状況にある。そういう状況の中で、一方で何かやりたいということと、ギリギリで緊縮している人たちとの間で摩擦が起きると。新しい起業家が新しい事業をしようと、それに対して地元で30年、40年と事業をやってきた人たちがやり方や考え方を変えろということとはなかなか受け入れられないわけですね。摩擦を調停する立場の人が必要だと思えますし、徐々に統合して統合していくというプロセスのモデレーターのような人が必要になってくると思います。

文化ということだけではなく、変化を統合していくと。一般の市民の人たちがそういった触媒の役割を果たしてくれることがよくあります。ローカルシステムの中で潤滑油として触媒としてサポートしていくと、政治的な争いとか摩擦というものもあると思います。地域の中でいろんな争いもあると思います。地域の新しい意味は何なのか、というのを見つけていく中で、必ず必要なプロセスにはなっていくと思います。

ただそこに外からちゃんと調停、ヘルプをする人がいないという方向へ向かっていく、ということになりにくい面があると思います。まずは、プロセスの最初の段階で、古い地域に新しい変化をもたらそうというところで、だいたい最初にそういった問題が出てきますね。

それがうまくいかなかったところも、実際に見てきました。失敗するところもあっていいと思うんですね。失敗するということは、例えばこのプレゼンテーションしたようなプロジェクトが必ずしもうまくいかなかった、というのものもあるし、それは失敗することが適切だったのかもしれない。ライブツィヒのケースは成功事例だと思います。ライブツィヒはうまくいった事例だと思うんですけど、やはりライブツィヒでもそういった摩擦があったんでしょうか。

大谷：いつも摩擦はありました。常にあります。空間の活用の仕方、時間の活用の仕方、いろんなこ

とで摩擦は出てきます。調理方法から何を調理するのかとか、どういうイベントをやるのか、というところで常に摩擦はあります。ただこういった摩擦とか競争は、基本状態として受け入れていく必要があると思うんですよね。摩擦があることによってコミュニケーションが始まるという側面もあります。簡単なことではないんですけども、そういう見方も一方で必要なのではないかと思います。

ステファン・プラガー：摩擦を調整していくので、ハウスオブジャパンの場合は誰が調停役を担ったんですか？大谷さんがなされたんですか？

大谷：はい。私も調停役の一人だったと言えます。けど私自身が摩擦の当事者だったりしたこともあるので、まあ常に状況によって異なりますね。

吉田：ありがとうございます。摩擦についての議論でしたけれども、他にお互いに質問、コメント等ありますか？

加登：ステファンさんに質問です。縮小する地域では、いろんなネガティブなことが出てくると思うんです。摩擦も一つだし、経済的な低下もネガティブな影響の一つだと思うんです。その中でこういった地域が低下していく、シュリンクしていく中のポジティブな価値を見つけていくことも必要だと思うんですよね。

例えば私も言いましたように、日本の大都市の中で歩ける、歩きやすい地域が出てくる、そういったポテンシャルの面にも目を向ける必要があると思うんです。私の質問はポテンシャルとか価値を地域でどうやって見つけていくか。次のステップのチャレンジであるかと思うんですけども、地域の価値、これまでの価値を継いでいくということもあると思います。新しい価値を見出していくということもあると思うんですけども、その価値付けをどうやって見つけていくんでしょうか。

ステファン・プラガー：複雑なご質問です。まず密集した町だと、基本的に土地がないですね。店をやろうとしてもあらゆる店があるので、店をや

る場所もない。そういった意味では、場所が空いているのも価値の一つだと思います。もちろん住んでいる人からすれば、空き家があるのが良いことだとは思わない。

それから町の見方、理解ですけれども、「実はポテンシャルなんだよ」と視点を変えることも必要です。地域の人たちがよく言うのは「この場所の思い出を失いたくない」「変えたくないんだ」ということです。コミュニティの中でもいろんなことがオーガナイズされています。インフォーマルなコミュニケーションのやり方ややりとり、活動など、リソースの使われ方がインフォーマルな形で地域に根付いているものがあります。外から来た人もそれがポテンシャルになりうると、何かを作るときに力になりうるということに目を向ける必要があるかと思っています。

私たちのパートナーのほとんどは、非常に問題解決に長けているということも知っています。インフォーマルな問題にも対応できる力があると。例えば隣に住んでいる市長に、何か許可をもらわなければいけない、通常であれば数ヶ月かかるようなものだと。そういうことに関しては、ちゃんとそれを理解する公式なやり方があるんだよと。複雑な手段が必要になってくる。それもやっていく必要があるんだということもまた大事なことだと思います。答えになっているでしょうか。

吉田：はい。ありがとうございます。よろしいですか。

では、私の方から加登さんに質問をさせていただきます。ウォークアビリティのある場所のロケーションについての大事さ、これを強調されていて、ウォークアビリティのある場所は分散した形で大阪の北部にあるということをおっしゃっていただきました。ですがその理由にはあまり触れられていなかったかな、と。なぜそんなにウォークアビリティの高い場所が分散しているのかということ、そこを少し教えていただけますか。理由に焦点を当てて、ウォークアビリティの場所がそういう状況なのか教えていただけますか。ウォークアブルな場所の定義とは、スプロールな場所であると、スプロールな場所というのはウォークアブルな場所である、というのが結論でしょうか？

加登：はい、そうです。おっしゃる通りです。理由としてはスプロール地帯にある、というのも一つの理由だと思います。ですが、私の研究では郊外ではどうなのかと。郊外の価値はウォークアビリティではないと私は考えています。例えば地方、農村部ではウォークアブルではないということなので、やはりスプロール地帯にあるというのが一つ理由だと思います。

スプロール地帯が分散されているからこそ、ウォークアブルな場所も散乱していると、スプロールエリアというのは自然と、というか偶然に開発者によって生み出されたと言えるのでしょうか。そうするとそれが都市化の影の部分だと。長い間そういう話がされてきた。ですが研究としては影だけではなく、ポジティブなところもあると思います。空き家、空き場所、空き地というのはネガティブとも考えられるけれども、ウォークアビリティの観点からはネガティブではなく、ポジティブに転換できるということです。

吉田：なるほど、わかりました。ありがとうございます。それではQ & Aの二つ目に移りたいと思います。私の方から質問させていただきます。シュリンキングシティの論文を初めて見たのは2008年か2009年、10年くらい前だったと思います。私たちはこの研究は新しい段階に入ったと思っています。

シュリンキングシティの次の段階を考えると、何が最も重要な項目になるのでしょうか。誰がイニシアティブをとる責任者となるのでしょうか。なぜなら、第1段階から第2段階の途上にある今、ちょうど中間地点にあるからこそ、今こういう題をお伺いしたいと思います。

誰が第二段階の責任をとる、イニシアティブをとるのでしょうか？例えばライブツィヒ、エアフルトの村々、大阪のスプロール地帯で、それぞれどうでしょうか？都市のインナーエリアそして小さな村や町のケース、それと都市部のスプロールエリア、と場所も様々ですので、それぞれ、誰が重要な役割を果たすのでしょうか。

大谷：はい。私の場合都市のインナーシティに関して、一番重要な点はダイバーシティだと思います。

す。人の多様性が重要だと思っています。鍵となってくるのは、イニシアティブの責任を持つかどうかはわかりませんが、シアクトダールに住んでいる人だと思います。市民だと思います。本当に普通の人ですね。すぐにお金持ちでもないし、建物を買うほどのお金があるわけでもない。地方政府とのコネもない。そういう本当に普通の人。私やビデオに出ていたような人たちこそが主役となると思います。私たちはその中で考えるべき大きな課題は、普通の人たちがどうやって都市の開発に関わっていけばいいのか、どのように都市開発に声を届ければいいのか、ということです。

ステファン・プラガー：なるほど、そのために人のネットワークの変化を研究でおっしゃったわけですね。ありがとうございます。私も強く同意したいと思います。特に周辺部においては市民が主役をとるべきだと思います。市民社会、民間のアプローチが重要になってくると思います。そういった人たちがともに解決策を見出す。構想が足りていないところを補完していく、そして構想を作り出していく必要があると思います。

病院とかそういった話だけではなく、例えば農村部ではパン屋さんやスーパーマーケットであるとか、そういうのを歩ける範囲内に設置できるのか。車で20km行かなくてもそういうのが手に入るのか、そういう問題があります。普通の人たちがとても大事になってくる。もちろん責任となりますので、行政や政治家、都市計画者というのがいますので、そこ間の摩擦はもちろん重要な問題です。摩擦というのも何度も申し上げておりますけども、こういった人たちとのイニシアティブに対する支えの仕組みが必要だと思っています。

視点を移すということですね。人口減少、低成長というよりは、持続可能な成長について、どんどん成長していく、成長が鈍化していくというのは可能性もあるんだということ。そういうところに視点を移す必要があると思います。市民の参加が非常に重要で、またイノベーションを生み出す可能性を持っていると思います。

吉田：はい。ありがとうございます。責任というのはちょっと、将来の役割というところで適切な

言葉選びではなかったかもしれませんが。責任ではなく重要な役目を果たす、という風に言い換えてもいいでしょうか。その上でいかがでしょうか？

加登：誰が担い手になるのか、何をしたらいいのかというところは僕も今この研究の続きでずっと関わっている中で悩んでいるところです。むしろ教えて欲しいなと思います。

研究的に言えば誰がという問いではなく、どのように協力しながらやっていくのか。市民と行政、企業が一緒になって、それをつなぐボランタリー組織としての大学やNPOが中心になって動くというのがおそらく重要なのではないかと感じています。茨木市だけじゃなくて、実は京都でもいろんな活動をしているんですが、その時に感じるのが行政やそういう枠を超えて活動されている方は、すごくいらっしゃるなあとと思います。

要はセクターごとに分かれられない人たちというのがやっぱり中心なのだろうなと思っています。そういう担い手の人たちはどういう方なんだろうと見てみると、リタイアした後の、定年した後のだいたい60～75くらいの元気な方。日本が高齢化していく中で、それぐらいの歳の方がセクターを超えてどんどん動き始めているというのは茨木もそうだし、京都でもよく起こっていることなのかなと思っています。

そのあたりの人たちがこれから地域に入れるような仕組みが重要なことなのかなと思っています。茨木でどんなことが起こっているのかというと、どんどん市民活動がいろんなところで起こっています。最近顕著なのは社会実験系ですね。茨木で言えば、市民会館の跡地をどう活用するのか、というものです。今までは行政のものだった場所を住民が実験的に使うという事例がどんどん増えていっています。楽しいイベント、子供と高齢者といろんな方がソーシャルインテグレーションできる活動をコツコツ積み上げていくしかないのかなあ、と考えています。

ネガティブな側面だからこそ、ポジティブなところで解決できるような方法を考えるのがスプロールだからこそできるのではないかと考えています。例えば高齢化が深刻な郊外の住宅地、関西で言えばニュータウンと呼ばれたエリアではもっと別の

アプローチ、例えばテクノロジーや自動運転をやるとか、テクノロジーベースで解決するという方法も考えて行かなければいけないのかなあ、というのが最近の僕の関心のネタです。

吉田：加登先生、ありがとうございました。私からの質問は、誰が一番重要な役割を担うのか、あるいはどのセクターが重要なのか、ということで投げかけさせていただいたわけであります。発言者の皆様方の答えは、パートナーシップということに行き着くのかな、と思います。そこが一番重要になってくるのかもしれない。

シュリンキングシティの次の段階においては、ということですね。ディスカッション、包括的、実務的、学術的な議論というのをすることができたかと思います。皆様方、非常に興味深いご発表いただきましてありがとうございます。このセッションはこれで終了とさせていただきたいと思います。皆様ご静聴ありがとうございました。